

ワイルドの夜の詩, “The Harlot’s House” について

今 村 潔
(龍谷大学専任講師)

90年代の詩人、特にアーサー・シモンズなどは、夜のロンドンという題材を好んで取り上げた。ワイルドの場合は、夜そのものを題材として取り上げることはあまりないが、夜から夜明けへと移り変わるときの光、あるいは光の効果を、印象派的に捉える詩をいくつか書いている。たとえば、“Impression du Matin”, “Impression: La Fuite de la Lune”, “Impression: Le Reveillon” などが上げられる。「朝の印象」以外は、特に都会の夜を題材として取り上げているわけではなく、人物も登場しない。また “Impression du Matin” には夜の描写はなく、夜明けだけを描いている。

ワイルドが、都会の夜とその中の人々を描いた唯一の詩は、“The Harlot’s House” である。シモンズなどが、月の光ではなく、人工的な明りの効果や印象に主な関心を置いているのに対して、ワイルドのこの詩では、都会の夜の人物に焦点が当てられている。

この娼婦の館の中、あるいは中にいる「人物」の様子を描いている3—8連に対して、1—2連、及び9—12連は、そこを通りかかった一組の男女と夜明けの情景が描かれている。

第3連から娼婦の館の中にいる人たちを、人間としてではなく、人形などのグロテスクなイメージを積み重ねてクライマックスに持って行く。まず、like という語を使って、“strange mechanical grotesques”, “black leaves”, “wire-pulled automatons” というように、比喩的に中の様子や人物を表現しているが、その人物自体も、最初はカーテン越しに見えるだけなので“the shadows”という表現は当然であるが、その後も“the ghostly dancers”, “slim silhouetted skeletons” というように、実体のある人間としては描かれてはいない。

さらに第7連からは、sometimes という語を、like の場合と同様に三回使って、“a clockwork puppet,” “a phantom lover,” “a horrible marionette” というように、館の中にいる人たちを生きた人間としては表現していない。しかしこの後、like という語を使って、たばこを吸いに外にでてきた「人物」を今度は、グロテスクなもの、人間以外のものではなく、“a live thing” と言うことによって、今までのように、グロテスクなイメージではなく、「生き物のように」と言うことで、逆に、ここに登場している「人物」が、普通の人間とは全くかけ離れた、グロテスクなものとして強烈に印象づけられている。

さらにこの詩は、iambic tetrameter で書かれているが、この行の後半は、“live thing” の二語にアクセントが来る。このことによって、この“live thing” という語がさらに強調され、ここでこの詩は頂点に達している。どれほどグロテスクなイメージを積み重ねても本当のグロテスクさは表現できない。その逆の表現をすることによって、より効果的にこの「人物」が人間でないということを示すことに成功している。

ワイルドは、この部分が気に入っていたようで、これより後の他の作品にも類似した表現が見られる。たとえば、“Lord Arthur Savile’s Crime” の第2章。特にここでは、“puppets” という語が使われている。

そして *The Picture of Dorian Gray* の第16章で、ドリアンが阿片を吸いに行く途中の描写では、“fantastic shadows were silhouetted against some lamp-lit blind.” と言う表現や、“marionettes”, “live things” という言葉にその類似性が見られる。

さらに、*The Ballad of Reading Gaol* の283行目から306行目には、“phantom”, “Slim shadows hand in hand”, “ghostly”, “saraband”, “grotesque”, “arabesque”, “marionette” などの語句が使われており、この二つの詩の、イメージの類似性は一目瞭然である。

